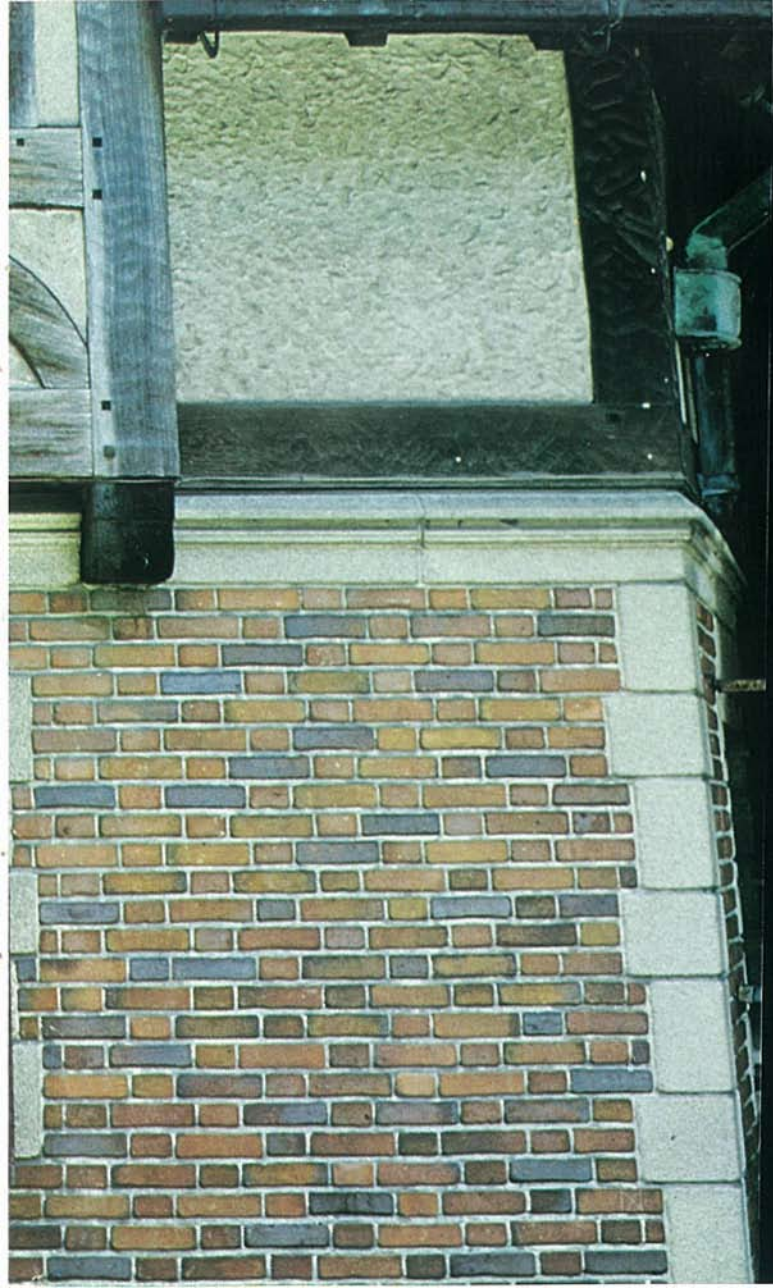


神戸のディテール

Detail of KOBE <18>

石阪 春生

写真／杉尾友士郎





元町バザー旅シリーズ

Italy



POROS OF ITALY

ネクタイの

元町バザー

神戸元町1番街TEL 331-7031

東京 東急百貨店

渋谷本店/日本橋店/吉祥寺店



イタリアの旅<4>Pompeii



あの娘のえがおが
 気になる秋——。
 さわやかな
 ライフスタイルをつくる
 スギヤの秋です。

おしゃれ小物と婦人服飾

スギヤ

本店 トアロード
 TEL 078(331)3436

- 六甲店 阪急六甲ファミリーストア内
078(871)2733
- 東京店 池袋バルコ地下1階
03(987)0567
- 梅田店 阪急三番街地下1階
06(372)4877
- 宝塚店 阪急宝塚南口駅構内
0797(71)5033
- 阪急神戸店 阪急百貨店神戸支店1階
078(321)3521
- 心斎橋店 心斎橋バルコ3階
06(245)1316
- 芦屋川店 阪急芦屋川ファミリーストア内
0797(31)8193
- 宇都宮店 西武百貨店宇都宮店1階
0286(35)0111

写真提供/ WORLD CO., LTD.

女っぽーいあなた…
毛皮のゆたかさが とてもビアン!



▲写真はシルバーフォックス コート モデル/古賀佐和子さん
今冬の毛皮コートは、ミンクなどのぐっとエレガントなものか、逆に思いついたスポーティ感覚のものが多く、とくに写真のような長毛類の毛皮で野性味のあるものが流行です。

創業15年

毛皮店

神戸国際会館1F
TEL(078)221-3327

さわやかな秋に着たい
KOBEカラーのエレガントな装い



▲写真のアリント服地は、イタリアのBISESの新製品。色づかいが新鮮です。ジョン・アントニオの秋の新作は、今までのあざやかさをなくして、グレー、黒などの無彩色や茶系統で色調をおさえた、落ち着いた感じのものに変わっています。

オートクチュール

アスター ニュートン

神戸アロード TEL 331-1818
大阪阪神 TEL 361-1201



花のある宝石店



☆タカタ宝石生花シリーズ〈2〉

秋しずか

川口豊昇 小原流家元教授



トア・ロード

タカタ宝石

〒650

神戸市生田区北長狭通2-161-1

tel 078・391・4105

New life lady in Kobe

動物好きのお嬢さん 愛犬と一緒に

茂川 秀子さん

〈ミス・インターナショナル日本代表・甲南女子大〉

今は夏休み
久しぶりに愛犬
サンちゃんを連れて
散歩しました。
真夏の太陽の下
少し暑かったけれど
武庫川の河原に
時おり吹く涼しい風
サンちゃんも
とてもゴキゲンで
カメラの方を向いて
ポーズをとってくれる
今日の主役は
サンちゃんでした。

ヒデコ

コトブキのある街は、みんな神戸のとなり街。

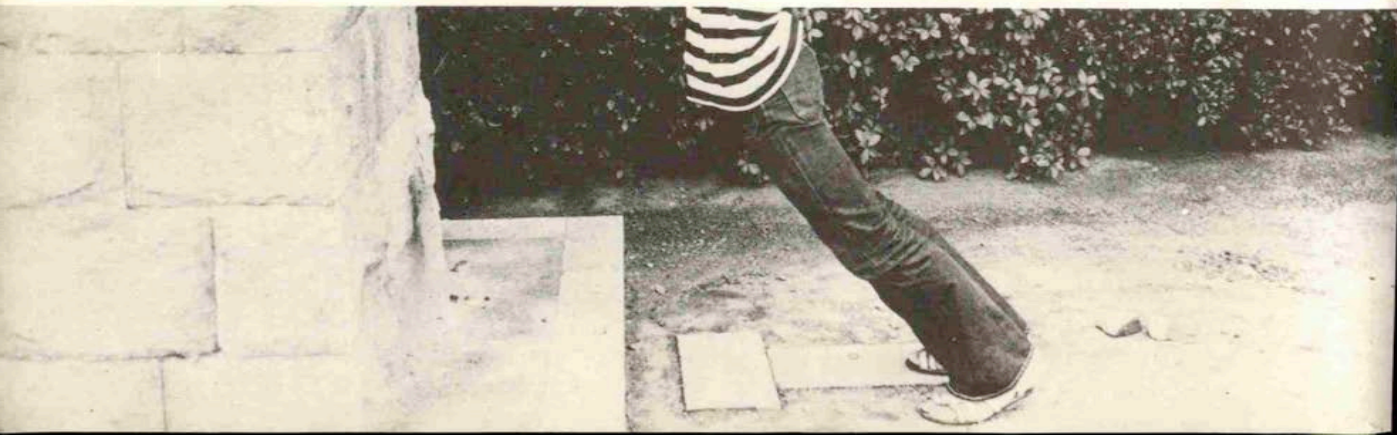



お菓子の  コトブキ
神戸・大阪・京都・東京

これは神戸を愛する人々の記録です
あなただけの神戸に愛しい場所を
神戸を記録する人々にはやさしい道がある
これは神戸の未来です

9月号目次

- 表紙／小磯良平（部分）
セカンドカバー／西村功
- 7 神戸ウチ／手塚博子／藤岡誠典
10 神戸百景／カメラ／小山保
17 ある集い／兵庫県彫刻家連盟
19 コウベスナック／みなとこうへ海上花火大会
20 神戸っ子ギヤリリ／河野遙紀
22 神戸のデイズ／及川／石阪善生／カメラ／杉尾友士郎
31 わたしの意見／市橋和生
33 随想三題／下大路田佳／土谷美津代／松下基明
36 ある集いその足あと／兵庫県彫刻家連盟
38 エッセロマネスク／三ノ角崎孝久
40 すいそう／望月美佐
42 すいそう／松井一郎
45 建設会／フアラシ／神戸市この一年
51 建設会／森本幸好／永田良一郎／川上船／本口重
52 技術ジャーナル／藤岡博典
55 フアラシ／フアラシ
57 フアラシ／パザール
58 フアラシ／市民大学講座より／大野順之助
61 神戸の朝／亀島文子／文野口武雄
67 新連載／たかはし・もうをめぐる神戸っ子たち
72 神戸の集いから
74 結婚特集／二人はふたり
82 結婚特集／お見合いしました
98 結婚特集／神戸っ子JUSTマリッジ
川結婚特集／現代のおと・あ・ら・かると
神戸のアーバンデザイン／モダンリビング／水谷観介
神戸を福祉の町に／福祉工場／橋本明
100 今月の催し物ご案内
101 企画部アフリカを行く／福岡康平
102 動物園飼育日記／亀井一成
103 アンデルセン／岡田洋
104 ニューヨーク便り／竹田洋太郎
105 遠足立見座／遠川長治
106 女性百景／H・ジュニア
107 ぴつと・いん
108 神戸百景会だより
109 ポケットジャーナル
110 連載小説 まだ運くない／葉月一郎／え・小西保文
111 図ボエムドコウベ／鈴木達
112 山海・船・港／キャンベラ号地中海をゆく
113 カメラ／米田定藏 藤原保之 立山肇
目次作品／橋松全二





優しい季節の街角が好きな
おしゃれ上手のあなた
ファッション・アイ・SAN-AI
変わりゆく季節に何かを
感じています

74 Autumn
いま  いつかの風景

東京・ギンザ

San-ai 三愛

三宮店 センター街さんプラザビル2・3F
AM11:00~PM8:00 ☎391-6861

★わたしの意見

「環境」とともに 息づく現代彫刻

赤根 和生

〈美術評論家〉



芸術の「日常化」の現象は第二次大戦後の美術界の著しい特徴だが、その動向のなかで芸術という権威の象徴でありつづけた「台座」を下りた彫刻は、閉ざされた空間であるアトリエや美術館を飛び出て、開かれた「環境」である野外空間で燦々たる陽光を浴びて鑑賞されるようになった。野外彫刻展の流行という世界的同時に立脚して成立した須磨離宮公園野外彫刻隔年展は今年で四回目を迎えすでに定着した。今回はテーマに「都市環境における彫刻」を掲げ、かつ初めての試みとして公募部門を設け、具体的にA・六甲山牧場、B・新神戸駅前、C・ポートアイランドの課題場所を明示したことに大きな特徴が認められる。

五月初旬に公募された作品四四二点（三四三人）から厳選された入選八点が今秋の本展に招待作品二五点とともに陳列されるが、それに先だって選外佳作を含めた四二点の模型などによる「エスキース展」が同月下旬神戸文化ホールで開かれた。この際新設された「市民賞」のための観覧者の投票が行なわれたことも特筆に値しよう。

このビエンナーレは「台座」にかわる新しい記念碑性の確立をめざす美術行政上の重要事であるとともに、神戸市が掲げる「人間環境都市宣言」のもとに「緑と彫刻のまち」のスローガンを具現しようとする宮崎市長の文化政策の一環をなすもので、湊川神社前から文化ホールに至る基幹道路に彫刻十数点を常陳した「彫刻ロード」がすでに実現しているが、このビエンナーレの結実として受賞作品によって二十年後には百余点の彫刻によって山と海に囲まれた神戸の美しい「環境」が、いやがうえにも生きいきと息づく情景を想像するのは楽しいことである。

〈彫刻のまち〉では先輩格の姉妹都市ロッテルダムが戦後いち早く市議会の満場一致の可決によって埠頭の広場に建てられたザッキンの『廃墟』が市民からヘヤンの風穴」とニックネームで市民から親しまれているように神戸市民の〈参加〉意識を期待したい。



末積カーポートビル

近代的な
立体駐車場
150台OK



●普通車30分＝¥100

スピーディな駐車 親切的な応待—

- 冷暖房完備・TV付の
待ち合い室もあります。
- あさ8時——よる10時(日・祭日営業)



末積株式会社

神戸市葺合区磯辺通4丁目6番地ノ2

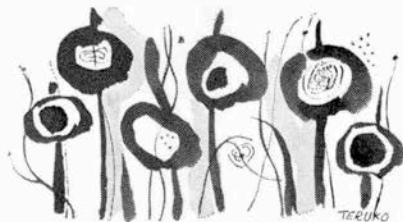
TEL 078 (221) 9 8 8 7



随想三題

〈結婚特集〉

そもなれそめ



カット／三浦 照子

国際結婚？

下大路 由佳

〈作家〉

結婚について何か書けといわれ
ても、ごくありきたりのカップル
が、ごくありきたりに結婚しただ
けのことで、人様に特別ご披露す
るようなストーリーもなく困っ
てしまうのです。他のカップルと違
った点といえば、わが旦那サマが
金髪碧眼のアメリカ人ということ
ぐらいのもの。しかし私たち自身
は、お互いにごく自然に暮らして
いて、結婚前も後も、別に相手が
アメリカ人であるとか日本人であ



ご主人のティーセンさんと

るとか、取り立てて意識してみた
こともありません。強いていうな
ら、彼は非常に日本的な変な外人
で、私は大和撫子らしさのない変
な日本人、その二人が、日本でも
アメリカでもないその中間的な位
置で歩み寄っている——とでもい
った状態が私たちではないでしょ
うか。

こう書いてしまうと何の面白味
もないので、平凡な私たちの生活
の中から何とか特別のエピソード
を、と頭をひねってみましたが、
確かにユニークな思い出がありま
した。

私たちは教会の式より二カ月前
く、東京のアメリカ大使館に結婚
届を出しましたが、その日は十月
三十一日。アメリカでは Hollow
een と呼ばれている日です。日本
では馴染みの薄い名前かもしれま
せんが、この日は一種のお祭りで
様々な種類のお化け（いうところ
の真白い布切れに目玉だけのゴー
ストとか魔女、その他諸々の種類
のお化け）に扮した人々がパレ
ードをしたりパーティを開いたり、
とにかく、お化けの顔見せみたい
な日なのです。ですから、この奇
妙な日に結婚するカップルは、ア
メリカではまず少なく、私たちの
アメリカの友人たちは、ずいぶん
と私たちを笑いのにしたもので
す。ところが、この大使館の次の
教会での式の方も少々おかしく、
十二月七日。これまた、真珠湾攻
撃の日でした。アメリカから式の
ために来日した彼の両親も私の両
親も、パール・ハーバーなんぞと
つくに忘れていたのか、どこから
も異議はありませんでしたが、こ
の日、私たちはとてつもない失策
を演じたのです。

宣教師として長年日本に在る彼の伯母の友人で、横浜に住む、フランク・コール牧師の教会で挙式をお願いした私たちは、当日三時に教会へ到着の予定でした。このコール氏の教会は横浜の郊外、中山という小さな駅の近くにありました。式の半月前、伯母と共に私たちはコール氏を訪ねましたが、この時は伯母の車で出かけ、二人して一生懸命その複雑な道筋を覚えて、つもりでした。しかし彼は外国人で日本の道路標識を一度きりで覚えるのは不可能、私の方は方向オンチ。当日、埼玉の新居から横浜近くまで這りついたもののさあ、道にまよったのです。いったい自分たちがどこにいるのかさえ分からず、ただただウロウロ運転するうちに、時間は無情に過ぎ、約束の三時。後部の座席では、私の花嫁衣裳用のブーケを抱えた父と紋付の母がカンカンに怒っています。父が怒るほどに私たちは焦ります。ますます道は分からなくなるばかり。とうとう近くの公衆電話で、彼らはコール氏に助けを求めました。

オートバイの上から私を振り返り大きく口を開いて何やらいっています。一時間半も結婚式に遅れたそっかしい花婿と花嫁に、微笑をいっぱい浮かべたコール氏が叫んでいたのは、*Smile*。その暖かい微笑を見た途端、私の目の前はますます涙でかすみ、念入りに仕上げたお化粧はどんどん流れて行きました。

まったく冷や汗ものの結婚式でしたが、今ではあの大失敗が一生忘れられない思い出話になって、かえってよかったみたいな気がします。

神戸まつりで

結婚式

土谷 美津代

（ぐるいぶなんといや）



披露宴のバーク

今から二年半前のお正月、私はあるスキー旅行に参加し、生まれて初めて見る銀世界の中で私たちは顔を合わせたのです。当時私はハタチ、彼は十七歳であり、誰もがこの恋愛のなりゆきを不思議に

思うかもしれません。

綿菓子のような雪と、そして彼と同行していた名前も知らない仲間たちと戯れ、ゲレンデにはいつものベドロ&カプリシヤスの「別れの朝」が流れていました。楽しい五日間が過ぎた時、お互いになにか魅かれるものを感じて、私は高松彼は神戸と瀬戸内海をはさんで真剣な交際が始まったのです。彼は高校生、私は洋裁学院の生徒、お互いに卒業をひかえてのころ、私たちの心はひとつに溶けあっていました。結婚するまでの二年半の間が一番幸福だったように思われます。

四月に彼は社会人となり、私も神戸で就職。結婚という目的のため、それからは苦しい恋愛が始まったのです。神戸にいればいつても彼に会える、そう思って親の反対をおしきって高松を出たものの二人の勤務時間の関係でまる一日のデートは月に一度だけ。週に一度の二時間ぐらいのあわたたしい逢瀬、私たちのデートとはただ一緒に過ごせる、それだけの喜びでした。高校時代は山岳部に所属していた山を愛する純粋な山男の彼は自然がとても好きでした。彼は歩きなれない私を引っぱり、四季おりおりの六甲山や神戸の町並を歩き回りました。二人でよく散歩したマヤケイブル、その近くにあ

る喫茶店で当時三百円のコーヒーを飲むことがささやかな贅沢であり、送ってくれる道の彼の暖かい言葉、力強い腕はすべてを満たしてくれたのです。

彼が私を選ばなければ、私が彼を選ばなければ、私たちはいつも同じ質問を繰り返していました。

二人の愛情は確かであっていても私たちの結婚にはいろいろな障害がありました。だけど私たちの努力は無駄にはならず、少しずつ両方の両親を説得して今年の一月十五日に婚約、十一月四日に結婚とこぎつけたのです。私は高松に帰り、少し遠くになってしまったものの十一月の結婚式を心待ちにしている私たちはごく普通の婚約者同士。そんな私たちが神戸まつりの中で挙式することになったのは四月のある日、突然もちこまれたのです。私たちはその話を受けることにしました。私の頭の中には十一月の予定だった結婚式があと一カ月で実現する、早く一緒に暮らしたい、それだけでした。五月十九日までの一カ月間は、ぐるーぶなんといやの方々の力であわただしく準備が進められました。いろいろな思惑の中でパレード結婚式が行なわれたのですが、白無垢の花嫁姿に身が引きしまる思いで緊張の連続でした。一方彼は、式の当日疲労が重なり病院に駆け込み

今日の式に出席するのはやめなさいといわれました。あまりに若いために当の本人だとは病院の先生も思われなかったのでしょう。

たくさんの人々に祝福されての挙式、レストランバーグでの披露宴と、無事終えることができました。とても疲れた結婚式でした。親せき、知人、その他多くの人たちの好意、そして彼のいつまでも変わらない深い愛情を感じて私は最高にしあわせな花嫁になりました。

驚きの

電撃結婚

松下 基明

《猪名野神社宮司》

そもなれそめは昨年の十二月十一日。それは私にとって一生忘れられない日、オリエンタルホテルのクリスマスパーティーは星のふるような夜であった。神戸つ子よりのお誘いで参加した私はそこで輝

くばかりに美しい（とその時は思った）妻の美恵子と出会ったのである。

神職の身ではあるが元来感じやすい独身の私には体内の血液が逆流した。母に後日語ったことであるが、この彼女と結婚できなければ多分一生独身でとおすようなことになるであろうと、一瞬運命的な予感に私は目前の世界がまるで違ったようにみえた。人と人の出会いの不可思議さであろう。

それからの私は毎日毎日そのことばかり考えるようになり一直線に彼女に肉迫していった。もっともせっかちで一本気な（自分でそう思っている）私はデートを重ねるにしたがって一日も早く結婚しようという決意を固めていった。

しかし、神社という特殊な環境にはいろいろと難かしいこともあり、果たして彼女がその中に飛びこんでくれるかが問題であったが、その心配も結婚した現在ではまったくなく、多忙な毎日明け暮れながら不平一ついわないのは私への愛情と心づかいであろうと感謝している。

出会いから一七四日目の六月三日に結婚式、その電撃結婚に友人諸兄の驚きの目に何となく爽快な気分。しかし、出会いのチャンスを与えてくれた神戸の街には大いに感謝しなければならない。



仲のいい二人さん

□ある集いその足あと

兵庫県彫刻家連盟

和田 真澄

〈兵庫県彫刻家連盟事務〉



7月19日生田神社会館での三賞受賞祝賀会

的集積力をもつ以上の何かを実行したいと願ったところに兵庫県彫刻家連盟結成の意義と力がある。

発足以来四年目を迎えたが、県下の彫刻家をほとんど糾合し、四十名近い作家が強力な体制を固めた。それぞれ各人は中央内外の彫刻界に所属したり、フリーの立場で活躍をしているのであるが、主義主張を超えた原点を連盟の出発点としている。それは社会的な彫刻活動に連盟の集約力を向けるための第一条件でもある。都市、農山漁村を一つの兵庫県と見て、環境の美化、豊かな生活環境づくりの運動を彫刻家として押し進める運動は全国的にみても異例のものであり、地方行政のバックアップもあって、前途洋々たる活動可能性を孕んでいる。展覧会の形式を取っても他の団体展とは異質の特徴をもっている。

社会環境の中に設置する彫刻のためのエスキース展（ミニチュア展）は、個展や一般団体展とは性質の全く違うものである。彫刻が起源の姿に立ち戻るための全員の力を集結した展覧である。県や市がこれと思う作品を買い上げた、連盟が選んだ作品を寄贈したりして、生活環境にうるおいを持たせながら整備していく。思い切った形で野外展を開催する。京阪神の彫刻団体に呼びかけて合同の

事業を展開する。世界各国産の大理石のみの石彫シンポジウムをやる等々、若々しく力の籠った連盟会員の活動が民主的な運営方式によって展開されていく。

会員の中に外国人作家が参画しているのも一つの特徴である。国外に遊学して帰国の後に画壇で己れのみ力関係を拡張しようという以前の考え方、中央集権をそのまま地方に移し変えた彫刻界の在り方に我々は大きく反抗する。だから、国外で目下研鑽中の数名の会員も、自分たちの国際交流の結果が連盟の主旨である社会的活動の中にこそ大きく生かされるのであるということを確認に意識して活躍をしている。

過日全会員集まって生田神社会館で三賞受彰の祝賀会を持ち、県下各界の方々より祝福を受けると同時に我々の運動に力強い激励を受けた。その受彰は、神戸市の人間環境都市宣言記念の文化功労賞、県知事よりの文化事業感謝状、甲山石彫シンポジウムに対する神戸新聞社奨励賞の三賞である。県下の彫刻家が丸となって個人のアトリエをとり出し、心意気とポテンシャルエネルギー、実行力にご鞭撻をお願いしたい。

■兵庫県彫刻家連盟事務所

神戸市生田区中山手通一目丁五〇一
新戸方 番二二一七七八七

彫刻家がアトリエの中に引き籠って自分の世界を創り上げる努力を続けるのは当然であるが、美的創造にたずさわる者として我々の生活の場——社会が無関係の世界である筈がない。一人一人の力を絶対のものとしてきた彫刻家が連盟を作ることによって単に算術

ヨーロッパオリジナルをあなたのお手もとに



LADIE'S

San Sakae

MOTOMACHI-1 ☎ 331-7885

GENT'S

San Sakae

MOTOMACHI-2 ☎ 331-5121

□神戸情話〈3〉

ラクガキ・エレジー

矢崎 泰久

〈話の特集 編集長〉

え・小西 保文



「そういえば、いつも雨」

はしを置いて、女がボツンという。スキヤキで知られる料亭の座敷だった。肉汁のしみたシラタキを口の中でほぐすようにしながら、同じことばを、二、三カ月前、やはりこの小部屋で聞いたことをおもいだした。

神戸へテレビの仕事で来るようになってから、彼女とは、時々一緒に食事をする。きれいな人だけれど、どこかカチンとくるようなきつところがあって、私は容易にうちとけなかった。知り合って、かれこれ一年近くになるのだが、特別な関係はない。

男女の間というのは、実に不思議なもので、だいたい初対面から二、三回目くらいまでに、いわゆる勝負といったようなものがついてしまう。ことに互いに魅かれるものがあれば、まずもたつかない。ところが、三、四回会っても、別に発展し

ない場合は、むしろ淡々として、浅くも深くもなく続く。

もちろん、男と女の関係が、セックスによってのみ結ばれるとは考えないが、大別して、セックスするか、しないか、の二つに分けることができる。するかもしれない、しないかもしれないといった、あいまいさは、私とは、ほとんど無縁のように思える。ことに年令的に開いている場合は、ことさらに判然となるようである。

「もつとご自分を大切になさったらい。テレビに出る人なんて、ロクな人いないわ。だいたい、あの小さな箱の中に映ると、どんな人でも軽くみえる。だから一日もはやく辞めてください。」

こっちにも理由があり、言い分もあるのだが、そんなことをいってもこの女には通じない。

「雨、やむかな」と私。

「テレビに出演するの好きなんですか」

「好きだとしたら……」

「はいべつします。ぜったいに」

「しかし、サンテレビに出たから、あなたと会えたんじゃないか」

「私となんか会わなくてもよかったんです」

軽くごはんをもって茶をかける。スキヤキのあとの茶づけは、私にとって大好物だ。このために肉を食べたような気分さえする。女は、私がサラサラと米を流し込むのを横目でみながら、不満そうにしている。

三宮駅を山側へ一丁ほど行ったところに、テール・クロスにラクガキをさせるレストランがある。料理はあまりうまくないが、落ち着ける店で、これもこの女に連れられて、ときたま行った。本番が終わってスタジオを出ると、受付の人がメモをくれた。ラクガキ・レストランの電話番号が書いてあった。

「女性の方ですが、お名前はおっしゃらず、テレフォン・ナンバーだけをお伝えしてくれ……」

受付の女の子は、うれしそうに笑っている。これだけで十分だった。私は、ホテルに戻って汗まみれのシャツをとりかえ、ダイアルを回した。

「一番奥の窓際の席、ルオーの複製がかかっているところ、おわかりでしょう。あの席で待ってます。」

午後十時を少しまわっていた。雨はあがっていて、適当に冷たい初夏の風が気持ちいい。スキヤキを食べて、別れたとき、今夜会うという約束はしなかった。しかも、これまでこんな方法で私を呼びだしたりしない女だった。いささかおっくうではあったが、何か特別な感じがあって、暗い官庁街をぬけて三宮へ向かった。

二十分ほどでレストランについた。テーブルの上に、冷えたコーヒートセブンスターが置いてあった。トイレにでも行っているのか、女の姿はなかった。軽い食事を注文して、ラクガキを読んで女を待つ。月並みな文句が多かったが、中には傑作もあって、けっこう楽しめる。テール・クロスは毎月一回、一日にとりかえるという。月末に来ると布一面にスキまなくラクガキがあつて、新旧とりまぜたコントラストが、また楽しい。

ウエイトレスが近づいてきて、私に電話がかかっているという。誰だか見当もつかない。受話器を耳にあてると、驚いたことに、この店で私を待っているはずの女からだった。

「赤い線で囲んだラクガキを読んで！」

それだけいうと、一方的に切った。私には思いあたるラクガキがあつた。すでに読んだときに、あの女が書いたのではないかとなぜか思ったのだ。

「いつまでもジラさないで！ 同じホテルに泊まります。イエスなら、午前二時にお部屋のドアを、ホンの少し開けといて」

しばらくしてレストランを出た私は、ラクガキに指定されたとおりに、五センチくらいドアを開けてベッドに入った。いつか寝てしまつたらしく、気がつくと朝であった。ドアは閉っていて、下に紙片がさしこまれていた。

《あなたの気持はわかりました。さようなら、二度とお会いしません。テレビは続けて下さい。必ず水曜の夜は見ますから》

フロントへ降りて行くと、顔見知りのボーイが声をかけた。

「お部屋のドアを開けたままおやすみだったの
で、閉めておきましたよ」

□とらべるずいそう

リガ・神戸姉妹都市提携文化使節旅行
昭和四十九年六月十四日～二十二日

笛と書で

ソ連の旅

望月 美佐

〈書家〉

五月二十七日の第一回書のリサイタルの後片付けもそこそこに、東京、関西の教室を走りまわって、やっと六月十四日午後零時三十分モスクワ行きエールフランス機のシートに腰をおろした時は全身の力がイッペンにぬけていくようであった。今まで五、六回は外国旅行をしているが、このたびはどうも不安と緊張感が常につきまとうのは何故だろう……。ソビエトという国をあまり知らないせい、また姉妹都市提携調印式に出席、市民交流をはかる親善文化使節団という任の重さからか、ひよっとするとハイジャックにでもあう予感かな？……。とりとめなく考えていたが、私の思い過ごしであった。十日あまりのソ連旅行は、土井芳子さんを団長とする、華・書・笛・舞・工芸・民間の文化関係者二十五人の恵まれたメンバーで編成され、今もなお私の全身を充実感と来年また行きたいという願望で溢れている。

昭和四十九年六月十四日、再びめぐってくるこのない？歳の私の誕生日であった。機内でシャンペンのプレゼントをいただいたが、エールフランス神戸支店長坂野さんのご好意であろう。感謝をしながら藤倉雅峰さん、

正木信之さんと飲み、ねむって十時間あまり、ソ連へ向けて果てしない空を飛んだのだった。

モスクワ着午後四時四十分、さぞ涼しいだろうと思っていたが、日本と同じ夏の装いにとまどいながらもバスから眺める緑の美しさと、十階、十五階建てのマンモス・アパート群がどどんとつく道路の広さにもただ目をみはるばかりだった。スプートニクホテルで最初の夕食、ここでも皆さんにシャンペンで誕生祝いをしていただき胸のあつくなるおもいだった。私はすっかり興奮してしまつて寝るところか、好気心の固まりの正木カメラマンとホテルを出る。通訳のルーシェさんに一枚しか持っていないとらの子10ルーブル（日本円四十四円）を借りてトロリーバスに終点まで乗ったが小銭がないので、ただにしてもらった。次に地下鉄に乗った。お金は駅で両替してもらった。ソ連の地下鉄は観光コースに入っているだけあって大変に豪華な建築で駅の所在地に関連のある歴史的な出来事を彫刻なり、描かれたもので飾られてあった。三つ、四つの駅を過ぎ、人々が多く降りるところで私達もついて降りた。全然何という駅かもわからな



リガの御婦人たちと歓談する筆者

かった。人の波にそって歩き、アイスクリームを買い、鈴蘭の花束を買って十時過ぎやつとタクシーでホテルへ帰ってきた。白夜なのであたりはまだ明かるく子供達は公園で自転車に乗って遊んでいた。日本の皆様方は全員おやすみの様子で、モスクワの第一日は過ぎていった。

(日本時間朝の六時頃)

十五日はクレムリン等市内観光をし、夜はボリシヨイサーカスをみて、推峰さんと「こんな舞台でやりたいわね」と二人して美しくなる程の大きかりな舞台装置だった。子供にかえて大いに楽しい夢をもった。

十六日はいよいよモスクワから一時間あまりの、リガ空港着、ソ日協会の方々に出迎えられ、早速バレエ「白鳥の湖」にご招待、国立オペラ、バレエ劇場の絢爛豪華さ、四層の天井桟敷までぎっしりの観客、華麗なシャンデリヤ、すばらしい彫刻に圧倒されて、ため息ばかりであった。

十七日は朝からリガ市内観光、リガ市は八百年の歴史をもった古代都市で人口は八十万人口ラトビア共和国の首都でバルト海にのぞむ、ヨーロッパ色の濃い古都、鋭く、高く、そびえる瓦屋根、曲りくねって続く狭い石畳の道を歩いていると、絵でしかみられない風景が現実、そしてその中に私がいるという感激が——。このような中世の美、今も失せぬリガ市と姉妹提携した神戸市



(上) 日本の文字の説明をする美佐さん。

(中) 筆によるごあいさつ、今晩は。

(下) 藤倉推峰さんの笛の音に大書する「友情」

に心から感謝をし、五時からのデモストレーションに全身全力を奮う。私の出番は二番目、書いたものが最後まで舞台背景になるので素材も選ぶ、まずはじめは日本の文字の説明をして理解してもらおう。私は着替え、その間推峰さんの笛の音が会場一面に流れ、より幽幻に神秘性をもたせると、ろうそくの灯の中で笛と書の出会いを二人して演出した。長くつき出されたステージの先端で「寿」と書き、ぱっと明るくした舞台で激しく「花」「さくら」の歌をかな文字で散らし、真赤な紙に「きもの」と右左に舞うように書く。推峰さんの横笛は低く高く流れるように響き私はオレンジの着物と早替りをして一気に「友情」と最後に大書し筆をおいておじめて五百人あまりの市民の方々、リガ市長、宮崎市長、浅井市議長、土井団長以下団員の皆様の見守る暖い表情を感じ、拍手の鳴り止まぬ中を推峰さんとのデモストレーションは終った。

十八日は歴史的にも貴重な厳肅な調印式に出席し、リガでの四日間、レニングラード・モスクワの日々も意義深いものであった。何かにつけてソ連旅行は今までの最高であった。リガ特産の琥珀の指輪が私の手に透明な赤褐色の光沢をバルト海の美しさのように、いつまでも思いつくとして残すことであらう。